



「おれを染め上げるように」奥へと流れ

ひるひる

おれ

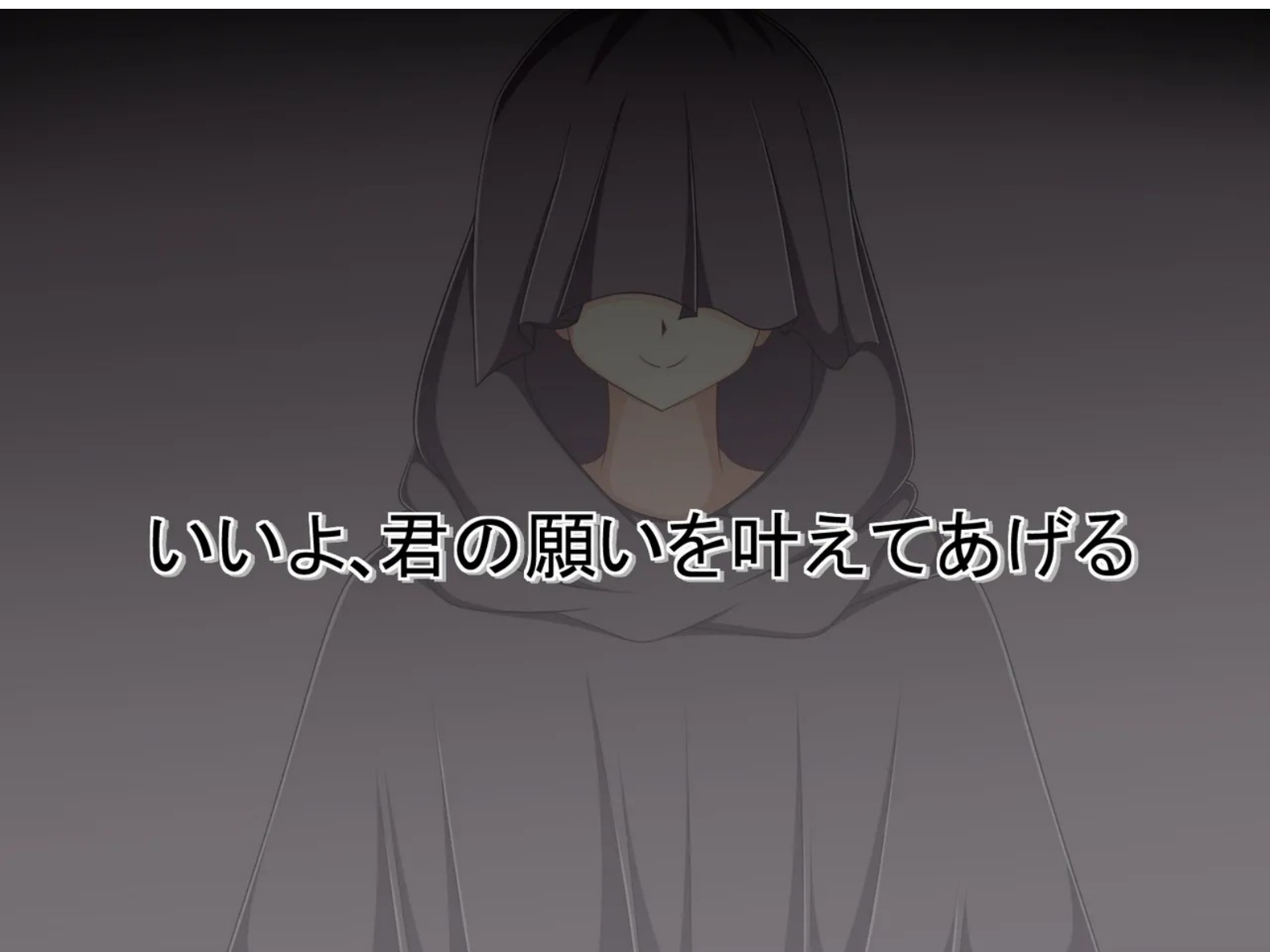
TSもの

~好きになっちゃったんだから仕方ないだろ!~

「優しい僕も」

「ためえ」

「ためえ」



いいよ、君の願いを叶えてあげる

頭の中で誰かの声が響く。

何を言われたか理解しようとする前に体が動かなくなり内側から作り変えられていく。

動く事は出来ないが痛みを感じるわけでもない。ただ着々と作り変えられていく。



どれくらい時間が経ったかは分からないがもう  
体の変化は止まっていた。

体の自由は相変わらず効かないが、もうじき  
目覚めるのだろう。

何かに押し上げるように意識が浮上していき  
目蓋がゆっくりと上がる。



「……何だこゝ、俺の部屋だよな？」

体を起こし部屋の中を見回す。

部屋自体はいつもの自分の部屋だと分かるが、周りに飾られているのはとても買ったことのないような女の子らしいものだ。

とりあえず着替えようと服に手をかけたところ  
で今の自分に起きている異常事態をようやく  
認識できた。



ドタドタドタドタ！

「父さん母さん大変なんだ！」

1階のリビングに降りるなり乱暴にドアを開け放つ。両親は何事かと驚いたような目で俺を見つくる。



「どうしたんだ？そんな格好で慌てて。はしたないから服を着なさい」

父さんは少し驚いたあと、こちらを注意してくる。

普通に考えたらいきなり見知らぬ相手が下着姿で家の中に入り込み自分たちのことを親呼ばわりしているのだ。それなのにこの反応はおかしい。



だが、この時の俺はそんなこと考えてる余裕もなかった。正直今の状況じゃ冷静になんてなれない。

……体が女になってしまっているのだから。

「何って見て分からないのかよ！お、俺、女になっちまってるんだよ！」

「女になったって……お前は生まれた時から女だろ  
うが」

父さんは呆れたような目で俺を見る。



「……は？何言ってる…」

「そうよねえ、変な夢でも見たの？」

「夢って…」

（どういう事だ？二人共、嘘や冗談を言っている顔にはみれないし、いったい何がどうなってるんだ）



「……それで、僕に連絡してきたと」

「こんな突拍子もない話まともに聞いてくれそうなのはお前しかいないからな」



俺の目の前で腕を組みながら唸っているのは子供の頃からいつも一緒だった親友の考だ。

藁にもすがる気持ちで話しては見たが、親友のこいつにも信じてもらえなかったら俺は何を信じればいいのかも分からなくなってしまう

「起きたら女になっていって周りもその事に何の疑問も思わない、さらに部屋のものまで変わっているか……」

「やっぱり信じられないか？」

「……いや、信じる信じないの前に僕の認識では優ちゃんは普通に男だったはずなんだけど」

「……は？」



「いきなり女になっただって連絡が来た時は何かの悪戯かと思ったけど、話してる時の癖や仕草は優ちゃんのものだしね…」

「それにおじさん達も優ちゃんのことを元から女だって認識してるみたいだし、とりあえず信じるしかないか」



「……う、うおおおお！よかったあ！いきなり意味の  
分からない事になって俺の方がおかしいんじゃない  
ないかって不安だったんだ！」

「ちよつ！嬉しいのは分かるけどそんな強く抱き  
つかないで……くるしい」



「はは、悪い、悪い！嬉しすぎてついな！」

「いいよ別に。優ちゃんの突拍子もない行動にはなれてるし。それよりも何か原因になりそうなことに心当たりないの？」



「原因か…：そういうえばこうなる前にちよつと変な夢を見たぞ。なんかローブを被った奴が俺の願いをかなえてくれるって」

「……女の子になりたかったの？」

「んなわけあるか！俺は男のままの方がいいつつうの！」



「ふーむ、でもそれだけ分らないんだったら  
やっぱりしばらくは様子見しかないね」

「様子見って…俺、女の生活なんてわかんねえぞ」

「大丈夫だよ。とりあえず慣れるまで僕がフォロー  
するし、それにいつもどおり学校が終わったら僕  
の家で遊んでいけばおじさん達にも変に思われ  
ないさ」

「そ、そうだな。それなら今までどおりだし大丈夫  
そうだな」



A purple-haired anime girl with green eyes is sitting on a large, smooth, orange-colored object. She is wearing a purple and white outfit. The background is a simple light blue gradient.

あれから二ヶ月もたった。

体は相変わらず女のままだが学校などでは考がフオローしてくれるおかげでなんとかやっていける。今も男だった時と同じように考の部屋で寛がせてもらっている。

「……はあ、日常生活は何とかやっつけていけてるけど結局元に戻る方法は見つからないままか」

「しようがないよ。こんな不思議なこと普通の人にどうこう出来るものじゃないし」

「そうなんだけどさ……」



(あゝあ、好きな見た目なのに自分相手じゃ  
どうしよもねえしな)

(……ん?)

何かい言いたそうな目でこちらをチラチラと見て  
来る考の視線に気づく。

何だ?と視線だけを向けると考は言いづらそうに  
しながらも口を開く。





「あ、いや、…その、パンツ見えてる…!」

「ああ。…でも俺のパンツなんて見ても楽しい奴  
なんていないだろ?」

「そ、そんなことないと思うよ」

A purple-haired anime girl with green eyes is sitting on a large, soft orange cushion. She is wearing a purple sleeveless top over a white long-sleeved shirt and a purple skirt. She has a slight smile and is looking towards the viewer. The background is a simple light blue-grey gradient.

「何だ、見たいなら見せてやるぞ。お前にはいつも世話になってるからな」

恥ずかしそうに目を背ける考が面白くてついからかいたくなりわざと見えるように足を広げる。

A purple-haired anime girl with green eyes is sitting on a large, pinkish-orange hand. She is wearing a purple sleeveless top and a purple skirt. She has a slightly blushing expression. The background is a plain light blue color.

「優ちゃん、その、今は女の子なんだしそういう事はしない方がいいと思うよ。その、僕も優ちゃんが変な目で見られるの嫌だし」

「あ、……うん。分かった」

考の言葉になんだか急に恥ずかしくなり慌てて  
足を閉じ普通に座る。

(あれ？何だこれ。さっきまで恥ずかしくも何とも  
なかったのに……。んなこと言われたら意識しちゃ  
まうじゃねえかよ……)





「ん……っ♡はあ…あ、ああ♡」

（パンツの上からいじってるだけなのにすごい濡れて来ちゃった）

はあはあ♡

ちゅちゅ



んんん♡

はあはあ♡

(…くそっ！俺は何してんだ。こんなこと今まで一度もなかったのにあいつの顔思い出すだけで気持ちよくて指がとまらねえ♡)

(あいつが俺のことを女の子扱いなんかするからっ♡)

んんん♡

「んんっ♥あ、ああっ♥あああ…っ♥」

くちゅくちゅと下腹部からなる淫猥な音に興奮してきたのか、甘い吐息が口から漏れ出してしまふ。

自分の口から出た淫靡な女の声に驚くも手を止めることは出来なかった。

はあはあ♥

あ♥

くちゅ  
くちゅ



「ん…っ♡はあ、はあ…あ…っ♡ちよっといじって  
るだけでこんなに気持ちよく…っ♡」

クリトリスの辺りを擦るたびに今までに感じた  
ことのないような快感の波が押し寄せる。

はあ  
はあ♡

ちよっ  
ちよっ





(体がビクビクって震えてっ♡女の発情した声が出ちまう…っ♡)

(俺、男のこことを考えながらオナニーして感じちまってるっ♡ダメだ気持ちよすぎてもうイクっ♡)

(女の体でイっちゃうっ♡)

あっ♡

はぁはぁ♡

ニゅち  
ニゅち



あっ♡

ははは♡

うわっ♡

ちゅちゅ

「♡♡♡♡♡」



(はあ♥はあ♥考もこと考えながらイっちゃまった...。  
どうしよう毎日会ってるのに顔合わせづらくな  
っちゃう)

はあ♥はあ♥

俺と考は幼い頃から、ずっと一緒にいた親友で、  
歳をとってもずっとこの関係が続くと思っていた。  
けれど今の俺は女で、今までのようにはいかない  
なんて嫌でも分かる。

(俺は考の事どう思っているんだろう...)

はあはあ♡



女になってからももう半年も経ってしまった。  
けれども相変わらず俺の体は戻っていない。

もう元に戻ることはないかもしれない。

そんな考えが自分の中で大きくなるにつれて  
ある思いが浮かび上がってくるようになった。

…そして今日俺は一つの決断をしようとしていた。



「なあ、お前俺の事どう思ってる？」

「どうって大切な友達…親友だって思ってるけど」

「いや、そうじゃなくて女としての俺をどう思ってるかって」と

考は質問の唐突さに食べていた菓子を落とすぐらい驚き慌てふためく。



「お、女としてって、なんでいきなり」

「俺が女になってから結構経つけどさ。未だに体は戻らないし周りも変わったままじゃんか」

「なんかさもうずっと、」のままなんじゃないかって思えてくるんだよ」



「なら俺も女として生きる覚悟を決めなくちゃダメかなって？そう考えたらさ、やっぱりお前には隣にいて欲しいんだ」

「で、でも、その…なんで俺なの？」

「そ、そんなの好きになっちゃったんだから仕方ないだろ！それともやっぱりダメなのか？元男の俺なんて…」



「…そんなことないよー優ちゃんはその、可愛いし正直いつも」うやうやして一緒にいてずっとドキドキしてた」

「だから、その…僕も優ちゃんと一緒にいたいよ」

「あ…♡」



「ちゅ…っ、ちゅぶ♥れる♥」

部屋の中で。ピチャ。ピチャと唾液が絡まる音が響く。

俺は親友と抱き合いながらキスをしている。



「はあはあ♥ちゅ…んっ…んむ♥」

つえばむのようなキスから徐々に深いものに変わる。  
お互いの舌を絡め合う恋人のようなキス。

男とキスをしているのに初めてのそれは深く、甘い。  
まるで脳が蕩けてしまいそうなキスだ。



振じ込まれるように口の中に舌が侵入してくる。

「んっ……ちゅぶ……んっ♥……ちゅ♥れろっ♥」

(…どうしようかとキスしてるって意識したら  
よけいドキドキしてきた♥)



お互いの舌を求め、絡ませ合うたびに脳が痺れ、  
秘所からはトロトロとした愛液が溢れる。

(すっごく♥舌が生き物みたいに口の中で絡み付いて  
来て気持ちいい♥頭の中溶けちゃいそうだ♥)



「ぢゅ、…ぢゅるる♥…ぢゅぶ♥」

「…じゅぶ…ぢゅぶ♥ぢゅっ♥れろ♥」

(…あ♥チンコ押し付けられてる♥俺とのベロ  
チュウで興奮してるんだ♥こんなにデカくして、  
そんなに俺の中に入れてたいのかな？♥)



手の中でビクビクと震えるそれをゆっくりとした動きで擦る。

「…っ」

「ど、どうした？何かまずかったか？」

「あ、いや、手で擦られるのが気持ちよくて…」

俺の問いに考は顔を赤く染めながら答える。



「そ、そうか」

自分の行為で考が感じてくれていると思うと嬉しさがこみ上げてくる。俺は最初より少し慣れた手つきでチンコを扱き始める。





「あは♥す〜い♥いな♥チンコもうガチガチだな♥  
はは、俺の手でこうされるの好きなんだな…?」

「…あっ♥」

龟头を指先でやさしくいじり刺激する。  
考の可愛らしい声に少し楽しくなってしまう。



（それにしてもチンコってこんなに硬かったっけ？  
血管もビクビク脈打ってすげえ興奮してる♡）  
擦るたびにトロトロとした我慢汁が溢れクチャ  
クチャといやらしい音を立てる。



「お前の我慢汁で手がヌルヌルになっちゃったな。もう出そうなのか？チンコすっごく熱くて手、火傷しちゃいそうだぞ」

もうそろそろ限界なのだと察し俺は射精に向けて少しずつチンコを抜く勢いを増していく。

「いいぞ、我慢しないで。イキたくなったらいつでも  
イっていいんだからな」

「…うー」

びゅるるるー！



勢いよく出たドロドロの精液が顔に掛かる。

「ん…♡出しすぎだぞ。そんなに俺の手が良かったのか？」

「うん。すごい気持ちよかった。今度は俺が優ちゃんにしてあげるよ」

「…へ？」





「優ちゃんのオマンコもうこんなに濡れてるよ」

「っ♡…っ♡あ♡」

トロトロと愛液が溢れる秘所を考の指が触れる。  
クチュクチュと淫靡な音を立てさせる指使いに  
声が漏れてしまう。



「うあ♥指でクチュクチュされちゃってる俺♥」  
「ん、あつ♥んんう…っ♥」

いやらしく這い回る指が敏感な場所を刺激する。  
自分の意志とは別に体が勝手に反応してしまう。



(俺の体こんな興奮してる)

男の指で感じてしまおう己の体にもう自分が女  
なのだと否応もなく自覚させられる。

「優ちゃんの中温かくてヌルヌルしてる。ニ、ニに  
僕のを入れるんだ」

考の硬く勃起したモノが目映る。



あぁっ♡

(…っ♡あれが考の…。すげえデカくてビクビク  
脈打ってるっ♡あんなの入れられたら俺どう  
なっちゃうんだ)

想像するだけで胸の高鳴りが止まらなくなる。  
考の愛撫で火照った体はこれからするであろう  
行為の期待と不安に熱く疼いてしまっていた。



「入れるよ優ちゃん」

「…うん」

ムキ

ムキ♡

はあはあ♡

（…あ♡入れられちゃう♡考とセックスしちゃうんだ♡）



「…っ！…っ！」

僅かな痛みはあったものの先程までの愛撫で  
蕩けきった膣穴は予想よりも簡単に考のモノ  
を受け入れる。

ズブズブ…

はぁ♡  
はぁ♡♡

あゝ♡



「だ、大丈夫!?!」

「ん、ちよっと痛かったけど思ったよりも大丈夫だから動いていいぞ」

考は様子を見ながらゆっくりと動き出す。

こちらに負担がないように気遣ってくれてるの  
だろう。その優しい腰使いが堪らなく嬉しくなる。



「っ♥んっ、んんっ♥ああ……っっ♥」

太くて硬いチンコが中で擦れるたびに膣内は  
考の形に拵げられていく。

幼い頃からずっと一緒だった親友が自分とセッ  
クスをしている。今までだったらありえなかった  
光景にゾクゾクとしたものが背筋に走る。





(あつ、俺の中で大きくなってきた……♡)

徐々に動きが激しくなるにつれジュブジュブと  
いやらしい音が立つ。出し入れされるそれは最初  
よりもずっと硬くてビクビクと脈打っている。



「っ！優ちゃんもう、俺っ！」

「いいいぞこのまま中っっ♡」

びゅるるる!!

あぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

ひゅゃ♡

ひゅゃ♡

ひゅゃ♡

「ぐいめん…中に…」

「いいんだよ。出していいって言ったのは俺の方  
だしな。それに薬も飲むから妊娠はしねーよ」

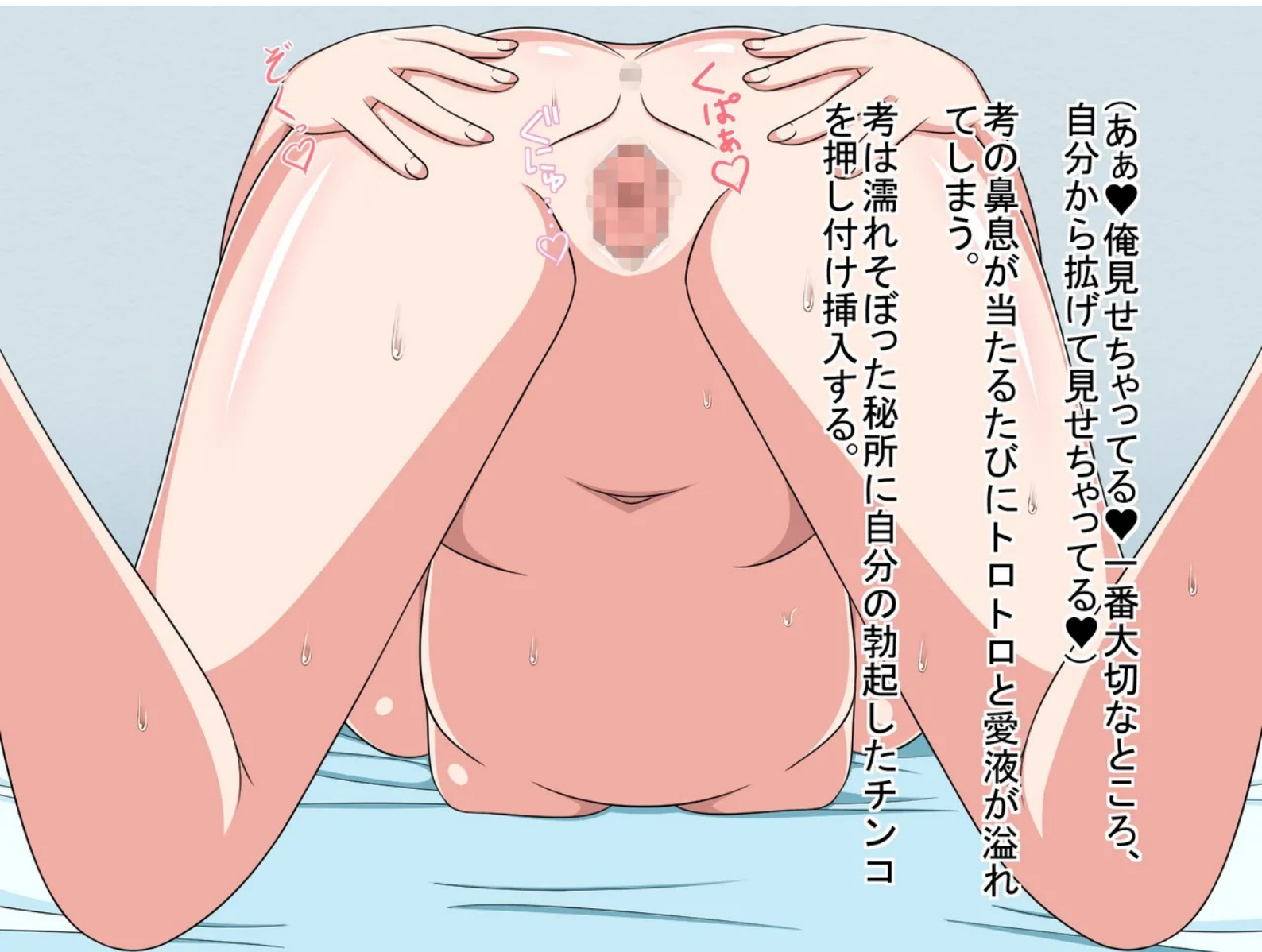
「…だからな。もっとしよーぜ♥」



(ああ♥俺見せちゃってる♥／番大切なところ、自分から拡げて見せちゃってる♥)

考の鼻息が当たるときにトロトロと愛液が溢れてしまう。

考は濡れそぼった秘所に自分の勃起したチンコを押し付け挿入する。





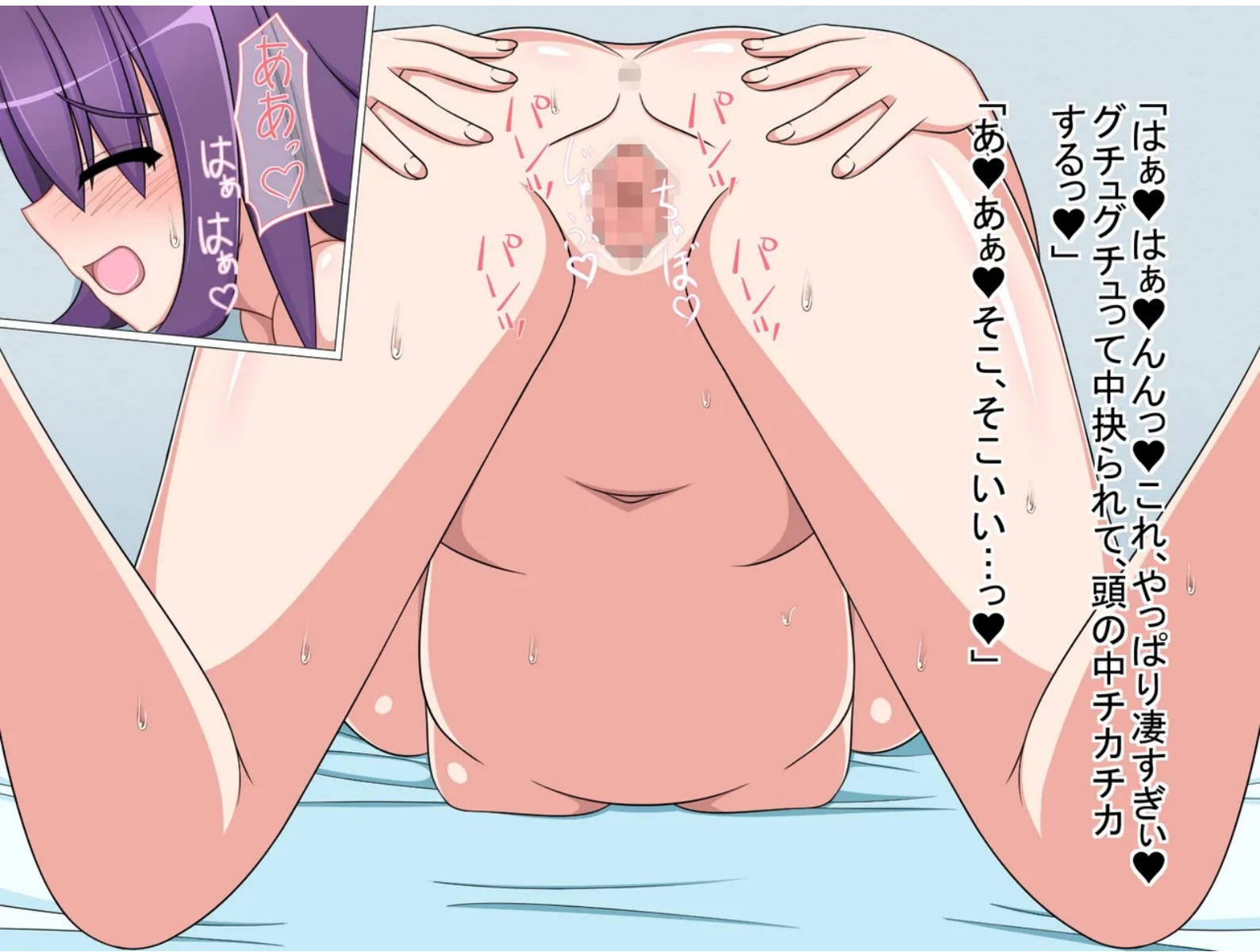
あの日以降、俺達は会うたびにお互いを求め合うようになった。

お互いに今まで押さえつけていたものが決壊したかのように目の前の肉欲に溺れた。



「あああ…っ♡入ってきたあ♡んんっ♡やっぱりこれ気持ちいい♡」

ズブズブと膣肉を掻き分けるかのように熱く硬いチンコが中に入ってくる。



「はあ♥はあ♥んんっ♥これ、やっぱり凄すぎい  
グチュグチュって中挟られて、頭の中チカチカ  
するっ♥」

「あ♥ああ♥そっ、そっいいい…っ♥」

ああっ♥

ちゅるん



激しい腰使いでこちらの性感帯を責めてくる孝。

チンコの先で子宮口を何度も叩かれるたびに頭  
の中が真っ白になり意識が飛びそうになる。

ああっ♡

♡♡♡♡♡

(やっぱり俺はもう女なんだ。こっぴどいって男を求めて体が疼いちまうっ♥今更元に戻るなんて嫌だっっておもっちゃってる…っ♥)

肌を重ね合わせる度に自分の中にあつた男が消えていく…。

それでも彼と一緒にいられるならそれでも良いとすら思えた。



あっ♡

「…あっ♥」

膣内のモノが大きくなると同時に動きが一段と早くなる。

「くっ！優ちゃんもう、出すからね！」

「出して♥ドロドロの精液、中に全部出してっ♥」

「…っ！」





びゅるるるっ！

奥にチンコを押し付けられながら射精される。

子宮に流し込まれ拡がっていく精液の感触にイキながらもその心地よさに浸ってしまう。

ああっ♡

♡♡♡♡♡

「あんなに出したのに何でまだこんなにデカくしてんだよ」

「優ちゃんが可愛すぎるのが悪い」

「……あほ」

シキ  
シキ  
♡

シキ  
シキ

はみ  
はみ  
♡





見せ付けるようにこちらに押し付けられるペニス。  
そそり立ったそれを見ただけで下腹部はまた熱く  
疼いてしまう。

改めて見るとやっばり凄く大きくて硬そうだ。  
これが今まで自分の中に入れていたんだと思うと  
愛おしくなりつい口で啜えてしまった。

んんっ♡

ずんっ♡

「んっ……ちゅぶっ……♡れる♡ちゅっ♡……ちゅるる  
ちゅぶっ♡」

（うあ♡舐める度に先っぽから我慢汁がトロトロ  
出てくる♡俺の口気持ちいいんだ♡）

じゃほじゃほ♡  
おしり♡

じゃほじゃほ♡

「じゃほ♡」

俺のフェラで気持ちよさそうな声を上げる者に  
気を良くし、さらに深く啜えこむ。

「ぢゅる、じゅぶる♡…んく♡じゅ、じゅるん♡」

「うーちよ、ちよつとまってー！そんな口の中で舐められたらすぐ出ちゃうー！」

考が止めようとするのも構わず口の中で舌を這わせ刺激する。

♡ ちよ ♡

じゃほじゃほ♡

ちよ♡



「ぢゆるる♥ぢゆぶぶぶぶ♥ぢゆぶつ…んっ♥…ぢゆるる…ぢゆるる…ぢゆぶつ♥」

「…っ…そんなにされたら、もっっ…」

はみ はみ ♥

じゃほじゃほ

ぢゅほ

（舌の上でビクビクしてる。本当に出そうなんだ）

（でもどうしよう。「このままだったら口の中に出ちまうのに口が止まらない♥」）

このまま出されることを想像したらドキドキと胸が高鳴り始める。

俺は少しでも早く射精へと導くように口を窄めじゅぽじゅぽと激しいストロークをする。

まるで自分からそれを望んでいるように。



はみはみ♡

じゃぽじゃぽ

ちゅぽ



「んちゅ♡じゅる♡んく…んん♡ちゅ♡ぢゅる♡」

「ごめん優ちゃん…もう出るっ…」

びゅるるるっ…!

んちゅ♡  
ぢゅる♡

ずいっ♡  
↓♡

「んむっっー……んくっっ♥んん♥じゅ、じゅるる♥」

（ああ♥喉の奥にドクドク出されてるっ♥）

喉の奥に叩き付けられた濃くドロドロとした  
精液。それは体を染め上げるように奥へと流れ  
込んでいく。

んんん♥

ずっけり♥

んんん♥



「んちゅ♡……こんなに濃いのが出したのにまだ  
こんなガチガチなんだな」

「まったくどれだけしたいんだよ♡」



「あぁっ♡」

トロトロに濡れそぼった秘所にペニスをクチュクチュと擦り付けられる。

それだけで甘い女の艶声が漏れてしまった。



「挿入るよ、優ちゃん」

「ひゅっ♡あああああっ♡」

あ♡

ああ♡♡

熱く硬いイチモツがズブズブと膣肉を掻き分け挿入される。

考のチンコを舐め続けていくうちに体が火照ってしまったのだらう。それだけで俺は軽くイってしまった。



「んんっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

じゅぷじゅぷといやらしい音を立てるほどの激しい動きに声が抑えられない。

あっ♡

ああっ♡

「ま、まって♡そんなに激しくされたら変になる♡」

「そんな」と言っただって優ちゃんのオマンコが絡み付いてくるんだよ」



「っ♡」

口では止めようとしても俺の体は逃がさないとばかりに考のチンコに絡みつく。

敏感な胸やクリトリスを責められながら、力強く膣内を掻き分けられるたび快樂の波に飲まれそうになる。



(後ろからこんな動物みたいになされてるのに体が  
喜んでるっ♡俺こいつにならもう何されても喜ん  
じゃうんだあ♡)





「ひう♡あぁあ♡もう、だめえ♡イケっ♡んんっ♡  
あぁあぁあぁ……っ♡」

「優ちゃん僕もっ!」

あぁっ♡

あっ♡

♡あっ♡あっ♡

びゅるるるっ!

膣奥に射精されると同時に体中を電気が流れ込んだみたいビクビクと震え絶頂してしまう。

「はあ、はあ♥出しすぎだバカ♥」



月日が経つにつれ優ちゃんは少しづつ変わって  
いった。言葉使いもそうだが、仕草や表情もどん  
どんと女の子らしくなってきた。

事情を知らない人が見れば元男だなんて分から  
ないだろう。

それだけ誰から見ても普通の女の子になって  
いった。



「…ん？どうしたの？こっちをじーっと見つめて  
……ははーん。さては見惚れてたな？」

「まあ、気持ちちは分かるけどね。私だって立場が逆  
ならそうしたくなるもん」

「あ、いや、それもあるけど。何か女の子らしく  
なっただなって思って」



「ん、お前もそっちの方が喜んでくれるかなって  
思ったし……。それに女の子らしく振る舞えばいつ  
でも「うやうやあって甘えられるしね」」



そう言うと優ちゃんは僕の胸に頬垂れ掛かる。  
彼女の体から出る甘い香りが僕の脳を蕩けさ  
せる。

『ね、しょうか♡』



「ふふ♥ちよつと弄つてただけなのにチンコもう  
ビクビクしてる♥興奮しすぎ♥」

足の指を器用に使いガチガチになったチンコを  
刺激する。

「こんなに大きくしてそんなに私の足気持ちいい  
の？」



(足の裏から血管がビクビクしてるのが伝わってくる♡んっ♡足で擦ってただけなのに私も濡れて来ちゃった♡)



フニフニと足の指で刺激を加えながら擦り上げる。  
こちらが攻めているはずなのに、私の頬は熱く口  
からは甘い吐息が出てしまう。



「つく！優ちゃん僕もうっ！」

「いいよ、そのまま出しちゃえ♥」

びゅるるっ！



「あは♥お前の精液で足がベトベトだ♥」

「ふふ♥こんなに出したのにまだガチガチに硬いし絶倫すぎだろ♥」





「んっ……ちゅっ……れろ……じゅぶっ……ごんごん」

「ひう♥そんなと」顔埋められたら恥ずかしいよ♥」

「ん、ちゅぶ♥……さっき散々足で弄られたからね。今度は僕がしてあげないとね♪」

「あっ♥そ、そんな……っ♥」



「ちゅっ...ぢゆる...ぢゆるるっ♥それに優ちゃんの  
オマンコは僕のを欲しがってヒクヒクしてるよ♥」  
「そ、それはっ♥んっ♥んっ♥あっ♥ああ♥」

んっ...

ちゅっ  
んっ



は♡  
は♡  
は♡

あ♡

ちゅぽ

「んっ…れろっ…ちゅっ…じゅるんっ♡」

ちゅぽ  
ちゅぽぽ

て…っ♡  
舌で♡  
♡  
口♡  
口♡  
舐められるの  
気持ちよく



ああ♡

はっ♡  
はっ♡

「あっ♡ああ♡そんなにされたら私もうイっちやう♡  
イっちやうよお♡」

「ちゅぶっ♡いいよ優ちゃんこのままイっちやうて」

「ひう♡あああ♡イク♡もうイっちやう♡」

はっ♡

ちゅぶっ



「愛液がすごいドロドロ溢れてくる。そんなに僕のチンコ欲しいの?」

「うん、頂戴い♡おちんちん中に頂戴♡」

「あっ♥ああ♥すごい♥いいの♥動物みたいにならなからチンコでコンコされるの好きい♥」

始めの頃の単調な動きと違いこちらを気持ちよ  
くさせようと弱いところを探り、しっかりと感じ  
させてくれる腰使いで責められる。

112  
112  
112

112  
112

あっ♥

けっ♥  
ほっ♥



「はあ……♥はあ……♥うあ♥中で熱いのがズブズブ  
擦られて……♥気持ちいい♥」

(「こ、これ良すぎて頭の中蕩けちゃいそう♥」)



「っ！優ちゃんの膣内、熱くてチンコ溶けそう！」

「ひうつ♡あつ♡だ、だめえ…っ♡そんなに激しく  
されたら感じすぎちゃうつ♡」

言葉とは裏腹に体は自分から甘え求めるように  
膣肉は考のチンコに絡みつく。



「う！中の締め付けが強くなった。もうイキそうなんだね。いいよ好きだからイケって。僕も優ちゃんの中に出すよっ！」

「うん♥きてえ♥私の中いっぱい出してえ♥」



びゅるるるっ！

(おおお♥お、おくてどんどん硬くなってきてる♥  
ああ♥出されちゃってる♥私を孕ませたいって  
精子が中にいっぱい出てるのお♥)



「っ！」

「あはっ♡♡ごうやって腰、動かされるの考も気持ちいいでしょ♡」

「はあ♡はあ♡私も考のおちんちん気持ちいいよ♡」



考の上に跨り気持ちいいところを探るように自分から腰を動かしていく。  
考のチンコは凄く硬く蕩けるようで腰を振るのに夢中になってしまう。



「あ♥中で、チンコが♥ああ…っ♥ゴリゴリして  
気持ちいい♥」

腰を動かすたび膣内でビクビクとチンコが震える。  
いつもは、されてばかりだから自分から動き快楽  
を求めるのは新鮮で楽しい。



「優ちゃんそんなにそんなふうにかざされたら  
もう出ちゃうっ」

「ふふ♥いいよ♥いっぱい私の中に出して。  
考の精子、私の子宮の奥に頂戴♥」



「っ…おんっ…」

びゅるるるっ！

「ああ♥ビチャビチャってオマンコの奥叩いてるっ♥  
熱いのがお腹の中にじんわりと拡がってるっ♥」



「…ん♥こんなに出されたらお薬飲んでも赤ちゃん  
出来ちゃうかも♥」


「ふふ♥もしそうなくても、ちゃんと責任とってね？」



「ゆ、優ちゃんくっ付き過ぎじゃない?」

「え〜?」これくらい普通だよ。もう公認の仲なん  
だしさ」





ここでは最初から女と認識されているからか、  
たいした障害もなく私達は結ばれた。

自分が男だったという記憶はあるがこうやって女  
として生きている今が幸せなので今更そんなもの  
どうでもいい。

今思えば私の願いはただ単に考と離れたくない  
つてことだったんだと思う。

子供の頃は大人になっても何だかんだで一緒に  
いるんだらうと思っていて。

だけど成長するにつれ、そんなのは無理なのだ  
というのが分かってしまった。



大人になりそれぞれの生活が始まれば今までのように簡単に会うことが出来なくなる。

ずっと同じように過ごすなんて無理なのだ。だから私は願ったのだろうか？

彼と一緒にいられる方法を。



誰がどうやってしたかなんて分からない。

けど感謝せずにはいられない。  
どんな方法であれ私の願いは叶ったんだから。



「今と変わらない関係でもいいからずっと一緒にいたい」か……」

「やっぱり心を男に変えても男と女じゃ結局こうなるか。せっかく記憶までイジってあげたのに」



「体が女のままじゃ男同士の変わらない友情は  
成立しなかったわけだ」

「……まったく。彼と離れたくないという君の願いを叶  
えるために色々してあげたというのに」



「……まあ、いいか。どうやら君の本当の願いは叶った  
ようだしね」

END























































































































